

学生寮における予防救急に向けての 取り組み

松本 弘美 (Hiromi MATSUMOTO)

鳥取看護大学 看護学部 看護学科

はじめに

多くの学生が共同で生活する学生寮においては、各個人が健康管理につとめる自助と、緊急時の助け合いにて生命への影響を最小限にする互助の両方を強化することが生活の安心につながる。そのため、鳥取看護大学・鳥取短期大学シグナス寮（以下シグナス寮とする）では、体調管理について「寮生活ガイドブック」や口頭にて指導するとともに、1年に1回は寮生全員を対象としたAED講習会を開催していた。その後、令和2年からの新型コロナウイルス感染症の流行により、寮生には寮内外での嚴重な感染対策の実施が求められた。実際に陽性者の出現は少なく、寮生の自助力は向上したと推察された。その一方で、寮内で救急搬送に至る事例は年に1件程度と少数であったものが、令和3年度は4件へと急増した。その原因は様々であるが、寮生の自助力のさらなる向上も課題となった。また、感染対策の実施により寮生同士の交流機会が減少したことや、AED講習会も開催できない状況にあったため寮生の互助力の低下が懸念されたが、コロナ禍においては寮生同士の交流機会を増加させることはできなかった。そのため、令和4年度は寮生の自助・互助力の向上を目的としてシグナス寮独自の救急対応動画を作成し全寮生が視聴する取り組みの実施と、救急救命士によるミニ講習会を開催した。動画には寮生や教職員、救急救命士が出演し、寮生がその動画を視聴したのちアンケートに回答した。その取り組みの効果もあってか、令和4年度は救急搬送に至る事例が0件となった。しかし、実践力向上には継続的な技術習得の機会と寮生同士の学びあいが重要であるため、引き続き救急救命士と連携し寮独自のAED講習会を令和5年10月に開催した。

以上の取り組みは、生活の安心につながる以外にも、総務省消防庁が推奨する予防救急とも合致している。令和2年版消防白書では、高齢化の進展等により救急需要は今後とも増大する可能性が高いことが示されており、救急活動時間の延伸を防ぐとともに、これに伴う救命率の低下を防ぐ対策として予防救急の重要性が言われている⁽¹⁾。寮生が自助・互助力を高め、かつ地域で活躍する救急救命士と連携することは、新たな形であるとともに地域のライフラインを守るための重要な取り組みともいえる。そのため、本稿では、シグナス寮における令和4年度・5年度の取り組みについて報告する。

1. 令和4年度の取り組み

(1) シグナス寮における救急場面への対応についての検討

シグナス寮の入寮生は鳥取看護大学と鳥取短期大学の1・2年生が大半を占めているが、鳥取看護大学の3年・4年生（以下3・4年生とする）が1割弱程度含まれている。今回、動画作成のため救急場面への対応を検討するにあたり、在寮期間が長くかつ看護学生として経験を積み重ねた3・4年生と寮運営委員会の教員2名で検討会を開催しながら進めた。また、新たな取り組みの趣旨に賛同を得た上で鳥取中部ふるさと広域連合消防局の救急救命士と連携しながら専門的な視点での助言をもと

学生寮における予防救急に向けての取り組み

に寮での救急体制の洗い出しと整備を行った。加えて、寮生が地域における多職種連携の実際を体験することで顔の見える関係づくりの構築も視野に入れて行った。内容の詳細は表1の通りである。

表1 シグナス寮 救急対応についての検討のプロセス

日程	実施内容
令和4年5月	シグナス寮にてプロジェクト会議を2回開催した 出席者：3・4年生6名と教員2名 ・今年度中に救急対応動画を作成し寮生が視聴することを決定した ・救急動画作成のための役割分担をおこなった
6月～7月	3・4年生が救急対応動画の内容を検討した ・場面設定は、過去の事例をもとに寮内の脱衣場で倒れた寮生を救急搬送する場面とした ・場面に応じたシナリオ案を作成し、救急救命士への質問項目を集約した
7月21日	オンラインにて第1回検討会を開催 出席者：鳥取中部ふるさと広域連合消防局2名、3年生2名、教員2名、寮のDA ¹⁾ 1名 ・自己紹介 ・救急救命士より寮生からの質問内容への回答を受ける ・今後の救急対応動画作成に向けた協力体制の確認 ・救急救命士より寮生へのメッセージ
8月10日	シグナス寮にて第2回検討会を開催 出席者：鳥取中部ふるさと広域連合消防局救急救命士1名、4年生1名、教員2名、寮のDA1名 ・寮内の「救急場面への備え」の良い点や不足点について助言を受ける ・鳥取中部ふるさと広域連合消防局によるミニ講習会の開催方法の検討 ・作成する救急対応動画についての詳細な打ち合わせ

検討の結果、シグナス寮の救急対応動画を作成し全寮生が視聴すること、AEDの取り扱いを学ぶミニ講習会は鳥取中部ふるさと広域連合消防局の救急救命士を講師として実施することを決定し準備を進めた。その際、上記の検討会の議事録を作成し、鳥取中部ふるさと広域連合消防局や本学の寮運営委員会内で共有しながら進めた。第3回検討会では、シグナス寮の「救急場面への備え」としてAEDの設置場所や持ち出し物品の準備状況、搬送ルート of 環境整備や寮生の協力体制について実際に寮の状況を見ながら話し合った。それにより、専門的な視点からの助言をもとに現状の課題を見出し改善につなげることができた。具体的には、持ち出し物品を入れたカゴに内容物の表記をすること、救急箱の設置について寮の冊子等にわかりやすく盛り込むこと、浴室内の救急対応に備えて防水仕様の担架を購入すること、湯あたり等に備えて扇風機や冷蔵庫を設置して氷などを常備するなどの改善を行った。このことは、単に寮生の救急対応への意識を高めることに留まらず、安全な生活環境の整備につながり専門職と連携する意義を強く感じる場面でもあった。また、検討会を開催した時期は新型コロナウイルス感染症が猛威を振るっていた時期であったためオンラインにて開催したが、画面越しであっても会話することで顔の見える状況を設定したことは、寮生が親元を離れ倉吉という地域の住民であることを自覚し、緊急時に駆けつけてくれる専門職の存在を身近に感じる場面となった。

(2) 救急対応動画の作成とミニ講習会の開催

救急対応動画の場面設定では、令和3年度の救急搬送事例の4件中3件が浴室もしくは脱衣室で起こったため、脱衣室で倒れる設定とし実生活に基づいたストーリーを寮生自身が作成した。また、119番通報では何を聞かれ何を伝えるのか、救急隊をどのように寮内に誘導しスムーズな搬送のためにできる寮生の動き、浴室利用制限やその解除について寮生全員への周知方法なども盛り込んだ。寮内での救急隊の動きも撮影しリアリティを追求することで、自分事として寮生1人ひとりに何ができるのかを考えるきっかけとなることを考慮した。また、動画への出演について3・4年生以外の寮生にも募集をかけ、総ブロック長という寮をまとめる役割を持つ学生達の協力も得ながら配役を決定するなど、寮内の自治組織の活用を意識した。以下、図1～3にて動画の内容を説明する。

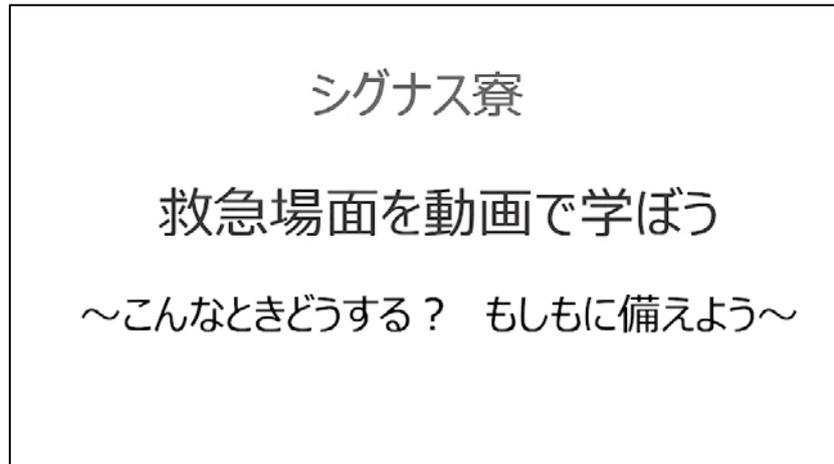


図1 救急対応動画のタイトル

1. 寮運営委員長からのメッセージ
2. 救急場面を見てみよう (以下の①～⑦の場面を連続で表示)
 - ①寮生 A さんが部屋から浴室に向かう
 - ② A さんが脱衣室で倒れ、居合わせた4年生がその他の寮生 (B、C、D さん) に③～⑦の指示を出す
 - ③救急用物品 (AED や毛布など) を取りに行く
 - ④ 119 番通報をする
 - ⑤救急隊による搬送が終了するまで浴室を使用しないことを他の寮生に伝達する
 - ⑥救急隊を寮の該当場所まで案内し、倒れた寮生 A さんが寮外へ搬送される
 - ⑦浴室の使用が可能となったことを他の寮生に伝達する
3. こんな時どうする? 詳しく見ていこう
 - ・倒れた人を発見したときの行動
 - ・浴室内で倒れたときは、可能であれば専用担架を使用する
 - ・119番通報で聞かれる内容と寮生が伝える内容
 - ・必要な物品の解説 (AED の設置場所や必要物品の種類)
 - ・館内放送の使用方や注意事項
 - ・救急隊を該当場所へ案内し、傷病者を寮外へ搬送までに必要な寮生の動き
4. メッセージ
救急隊、寮 DA、寮長
 - *前編後編の2部構成とし、前編9分19秒、後編7分28秒

図2 シグナス寮救急対応動画の内容



図3 救急対応動画の一場面（図2の2-③）

また、技術習得の機会となる AED 講習会については、感染対策のため全寮生が集う方法を断念し希望者 30 名程度に絞ったミニ講習会として開催することとした。その際、救急救命士側からの提案をうけて、成人向けの蘇生法に限らず、鳥取短期大学幼児教育保育学科に所属する寮生を考慮して小児向けの蘇生法も学べる機会を盛り込み、より興味関心を持って参加してもらえる企画とした。

上記の準備のもと、令和 4 年 11 月 16 日シグナス寮にて動画撮影とミニ講習会を開催した。講習会には寮生 23 名が参加し、参加者アンケート（回収率 86.7%）では「大変満足した」が 80%、「満足した」が 20%の結果であった。参加動機は、「寮内で何か起こった時のため」や「実際に現場の救命士のレクチャーを受けてポイントを習得したいと思った」「小児の心肺蘇生法を学ぶことができ将来の保育の現場で役に立つ」などの回答があった。加えて、看護大学 2 年生の参加も多く、彼女らは次年度からの AED 講習会を担う予定であるため、専門職の講習を体験する貴重な機会となった。

（3）作成した救急対応動画の視聴とアンケート結果

シグナス寮独自の救急対応動画を完成させ、令和 5 年 1 月には寮生全員に視聴を促し視聴後アンケートを行った。自由記述において「自分のこととして考えることが大切だ」「自己の健康管理をきちんとしておきたい」「普段の生活の中で緊急事態が起こる可能性をいかに意識していないかを感じた」「自分にもできることが多くあることが分かった」「即座に冷静に対応することが大切だ。そのためには手順を理解すること、AED の使い方を学ぶこと、役割分担が重要」「寮生が一体となって行動することが必要」「体調不良者だけでなく、寮全体のことを考えて行動する必要がある」「（入浴時の救急対応）普段以上にプライバシーを保護した対応が求められる」「物品の置き場所だけでなく、使う状況を想定し考えることができた」「（過去に浴室で気分不良となった経験がある）人に迷惑が掛かるからと思うのではなく、周りに助けを求めたいと思った」などの意見があった。以上のことから、救急対応動画を視聴することで、自助互助にむけた意識の向上につながったと考える。

2. 令和 5 年度の取り組み

（1）令和 5 年度 シグナス寮 AED 講習会の考え方

シグナス寮は学生の集合体であると同時に地域住民の集合体ともいえる。近年、社会教育の場としての地域を見直し、住民が学ぶだけでなく、支えあい、地域のきずなを深める活動を推進することが求められている⁽²⁾。そのため、救急について寮生同士で学びあい支え合うことはきずなを深める重要な活動といえる。シグナス寮には看護を学ぶ学生がいることを強みとして救急対応の実技部分を寮

生相互に学び合うことで単なる手技の理解に留まらず寮内のきずなにつながる。もちろん、無資格な学生同士の学びあいだけでは十分であるとはいえない。そのため、救急救命士という専門職のサポートを得ることが重要である。シグナス寮の強みを生かし最小限のサポートを得ながら寮内で学び合うことができれば地域の資源を守ることにもつながる。以上のことから、シグナス寮独自の新たな取り組みとして、寮生が講師となり寮生同士で学び合う AED 講習会を開催することとした。しかし、あくまで試験的な試みであり汎用できるものではないことを強調する。

(2) シグナス寮 AED 講習会の開催までの軌跡

3・4年生10名と教員2名は、令和5年5月から第1回目のプロジェクト会議を開催し、10月に AED 講習会を開催する予定を立てた。その後、3・4年生は講習会の企画書や開催後の参加者用アンケートを作成し、それらをもとに3回の会議を行った。そのうち1回は鳥取中部ふるさと広域連合消防局の救急救命士とのオンライン会議であった。ディスカッションしながら専門職の視点や経験を踏まえた助言を参考に実践可能な方法を検討した。このように進めていく中で、最も重要であったことはスケジュールの調整であった。4月から10月の寮生の状況であるが、4年生は就職活動や統合研究、臨地実習を行っている。また、3年生は複数の必修科目と多くの課題をこなしながら9月から始まる臨地実習に向けて準備をする時期であるため、それぞれ多忙な中での取り組みである。自分たちの生活の安全を目的とした寮の行事に対して時間を工面することの優先順位は高くあるべきだが、本来の目的である大学での学びや生活のためのアルバイト等も優先事項となる。その中でも、モチベーションを維持しながら協力を得ていくには、寮生同士でスケジュールを立て役割分担をすること、それを尊重した支援の方法を模索していくことが重要である。開催後に「やってよかった」という思いこそが次につながり継続への第一歩であることを柱として、教員や連携する救急救命士も関わった。具体的には、事前にeラーニングで普通救命講習編の受講と修了テストに合格し、その後、鳥取中部ふるさと広域連合消防局内にて救急講習を受講した。その際は、自分たちがどのように伝えたと効果的なのかを考えながら参加し貴重な時間を有効に活用できた。その後、開催前週には3・4年生に寮運営委員会の教職員や救急救命士も加わりリハーサルを行った。そのような柔軟な支援があったからこそ実現した企画であったと感じる。

(3) シグナス寮 AED 講習会の開催とその後のアンケート結果

令和5年10月27日(金)大学内にて AED 講習会を開催した。寮生全員を対象に救急対応動画を視聴してから講習会に参加することを義務づけた。講習会では3・4年生が司会、グループに分かれた演習の進行、シミュレーションなどを行い、教職員や救急救命士2名も参加しサポートを行った。3・4年生のスケジュールと1・2年生の補習授業との関係で日程調整が難航したため、当日の参加者は39名(3・4年生を除く)と少なかった。しかし、先輩寮生から学ぶことで、真剣に聴講し実践する1・2年生の姿が印象的であった。その後のアンケートでも「動画や実践を通して先輩、先生や救急隊の方との連携の必要性を学んだ。日頃から寮内の生活においても協力していきたい」「いつ何が起ころうとも自分がすべきことをわかっているようにしたい」「寮生で倒れている人がいたら勇気を振り絞って動けるようにしたい」などの回答が多くあった。

おわりに

今回の AED 講習会に関しては、寮生同士の学びあいによる効果の検証は行っておらず、寮生による自治活動のなかで実施可能なプロセスを模索し試行したに過ぎない。しかし、連携の効果は確実に寮生に伝わっており、寮における予防救急に対する取り組みは非常に意義深いものと感じる。学生寮には多くの若者が暮らしていることから寮は地域の大切な資源であり、かつ寮生は地域住民としての貢献も必要と考える。今後、鳥取看護大学、鳥取短期大学の学生に対し、寮における予防救急への

学生寮における予防救急に向けての取り組み

取り組みを発信し、一人暮らしの学生にも学びあいの輪を広げていく予定である。

今回の取り組みの趣旨に賛同し多大な協力をいただいた鳥取中部ふるさと広域連合消防局救急救命士をはじめとする鳥取中部ふるさと広域連合消防局の皆さま、シグナス寮運営委員会の皆さまに感謝申し上げます。

《注》

1) DA はドミトリーアテンダントの略、寮職員の名称である。

《引用文献》

(1) 消防庁：令和2年度版 消防白書 https://www.fdma.go.jp/publication/hakusho/r2/items/r2_all.pdf

(2) 滋賀県社会教育委員会議：「住民同士が学びあい、住民相互が支えあう地域のきずなづくり（提言）」、

2010年3月 https://www.nionet.jp/11division/shakaikyokuin/nse/sec_h220326/h220326teigen.pdf

(1) (2) とともに令和5年1月3日閲覧